

節連接マーカールにおける動詞の活用形とモダリティ

著者	角田 三枝
雑誌名	国立国語研究所論集
号	4
ページ	109-137
発行年	2012-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000500

節連接マーカにおける動詞の活用形とモダリティ

角田 三枝

国立国語研究所 共同研究員 [-2012.03]

要旨

本論は、日本語の譲歩条件または譲歩の意味を表す節連接表現 (clause-linkage markers, CLM と略す) を扱い、以下の三つのグループに分け、以下の (a) から (d) を述べる。

グループ A : $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$, $-(y)oo=to=mo$, $-te=mo$

グループ B : $=ni\ se-yo$, $=ni\ si-ro$, $=ni\ si-te=mo$

グループ C : $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$, $=to=wa\ i-u=monono$

(a) 上の三つのグループの CLM の形態的特徴と使い分けは、角田/Tsunoda (2003, 2004, forthcoming) が提案した「節連接とモダリティの階層」が反映している。

(b) 先行研究では、譲歩条件節のタイプを三つに分けている。Alternative concessive conditionals, Universal concessive conditionals, Scalar concessive conditionals である。本論は、その Alternative concessive conditionals を「肯定否定」(Polar) と「併記」(Listing) の二つに分けることを提案し、四つの従属節のタイプに分ける。「肯定否定」と「併記」の区別は CLM の用法に反映している。この四つのタイプの違いが、従属節の表す確信度に反映する。具体的には、「肯定否定 < 普遍的併記 < 極値」という階層である。

(c) 上の三つのグループの CLM の形態的多様性 (動詞の活用形、および助詞などによる) は、従属節の意味、およびモダリティの違いを表す。特に、CLM に含まれる動詞の異なる活用形は、話者が従属節の内容にどの程度の確信を込めて表すかの違いを示す。つまり、CLM が epistemic modality を表す。

(d) 上の三つのグループの CLM の表す確信度は、「グループ A < グループ B < グループ C」の順番で高い。また、各グループ内でも CLM によって表す確信度が違う*。

キーワード：譲歩条件、譲歩、動詞の活用、確信度、真偽モダリティ

1. はじめに

本論は、日本語の節連接表現 (clause-linkage markers, CLM と略す) のうち、譲歩条件または譲歩を表す節連接表現 (以下では、「譲歩条件・譲歩の CLM」と呼ぶ) の形態、意味、用法を論ずる。以下の CLM を扱う。

グループ A : $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$, $-(y)oo=to=mo$, $-te=mo$

グループ B : $=ni\ se-yo$, $=ni\ si-ro$, $=ni\ si-te=mo$

グループ C : $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$, $=to=wa\ i-u=monono$ ¹

グループ A では動詞の語根に接尾辞 $-(y)oo$ または $-te$ が付き、それに $=ga$, $=to$, $=mo$ などの助

* 本論文は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「節連接へのモーダルの・発話行為的な制限」(基幹型、2009年10月～2012年3月、リーダー:角田太作)の成果です。本論の執筆にあたり、査読をご担当くださった国立国語研究所の査読委員の先生に、多くの貴重なコメントを頂きました。心より御礼申し上げます。また、プロジェクトのメンバーの皆様からのコメント、国語研の編集担当の方のご助言に心より感謝申し上げます。

¹ 本論では、「-」は、接辞を表す。「=」は、付属語 (clitic) を表す。(角田 2007 参照。)

詞が付く。-(y)oo=to=moのように、助詞が二つ付く場合もある。

グループ B では動詞のル形, タ形に, 助詞の =ni が付き, そこに動詞「スル」の活用形がつながる。その後にさらに助詞の =mo が付く場合もある。スルの活用形は, 命令形 *se-yo* または *si-ro*, あるいは, テ形 *si-te* である。

なお, グループ B の =ni *si-te=mo* と形態の似た CLM =to *si-te=mo* がある。=to *si-te=mo* は, グループ B の CLM と同様にスルの活用形を含む。しかし, グループ B の CLM とは形面で違いがある。助詞の =ni ではなく, =to が付いている。さらに, 5.3 節で述べるように, 意味・用法の面でもグループ B の CLM とは異なる。従って, =to *si-te=mo* はグループ B に入れない。

グループ C では動詞のル形, タ形に, 助詞の =to が付く。さらに助詞 =wa が入ることがある。そこにさらに動詞「イウ」の活用形がつながる。イウの活用形は, 命令形 *i-e*, テ形 *i-t-te*, または, ル形 *i-u* である。その後にさらに =mo, =monono などの助詞が付く場合もある。

本論で論ずることは, 以下の通りである。

(a) 譲歩条件・譲歩の CLM の形態的特徴と用法は, 角田/Tsunoda (2003, 2004, forthcoming) が提案した「節連接とモダリティの階層」の五つのレベルに反映していることを示す。

(b) 譲歩条件節のタイプ「極値」, 「選択的」, 「普遍的」のうちの「選択的」を「肯定否定」と「併記」に分けることを提案する。

(c) 譲歩条件・譲歩の CLM の形態的多様性(動詞の活用形, および助詞(付属語あるいは clitic)などによる)は, 従属節の意味, およびモダリティの違いを表す。特に, CLM に含まれる動詞の異なる活用形は, 話者が従属節の内容にどの程度の確信を込めて表すか(以下, 確信度と呼ぶ)の度合いの違いを示す。つまり, CLM が epistemic modality を表す。具体的には以下の通りである。

(c-1) CLM が表す確信度は, グループ A が一番低く, 次いでグループ B であり, グループ C が一番高い。これを図 1 に示す。



図 1 CLM の三つのグループの確信度の度合い

(c-2) 各グループの中でも, CLM の違いによって確信度の違いを表す。この確信度の違いには, 譲歩条件節のタイプ, すなわち, 「肯定否定」, 「普遍的」, 「併記」, 「極値」の違いを反映する。図 2 に示す。



図 2 譲歩条件節の四つのタイプと確信度の度合い

本論の構成は以下の通りである。第2節では、先行研究を述べる。第3節では、話者の確信度と形態、および五つのレベルとの関係を述べる。第4節ではグループAのCLMの表す確信度の違いを述べる。第5節では、グループBのCLMの表す確信度の違いを述べる。第6節ではグループCのCLMの表す確信度の違いを述べる。第7節では、譲歩条件節のタイプの違いと表す確信度を考察する。第8節では結論を述べる。

2. 先行研究

角田 (2006a, 2006b) は、本論で述べる CLM およびその他について、CLM 自体に表れる動詞の形態 (活用形) と意味の相関性について、確信度の違いを述べた。本論では、角田 (2006a, 2006b) で述べたことから発展し、これらの CLM 全体の形態と確信度の関係を述べる。

本論で扱う CLM のいくつかを個別的に扱った先行研究はある。(グループ・ジャマシイ (1998), 国立国語研究所 (1951, 2001), 森田・松木 (1989), 泉原 (2007), 前田 (2009), 田中 (2010), 富樫 (2005), 藤田 (2008), 松浦 (2010) など参照。) また、特にテモ (-*te=mo*) については多くの先行研究がある。しかし、それらの研究は、(i) 本論のような活用の違いを見ていないし、(ii) 体系的、組織的ではない。

Narrog (2009: 157-158) は、日本語のモダリティ全般を扱う中で、従属節のモダリティ (Subordinate moods) として、動詞の -*te=mo*, imperative (命令形。 *se-yo* など) および hortative (-*yoo*) の形が譲歩条件を表す CLM の一部になっていることに言及している。しかしながら、本論で述べている話者の確信度の違いについては何も述べていない。

また、より広い観点から、Sweetser (1990: 139) も、concessive conditional と epistemic modality の関係に言及している。しかしながら、本論で述べているような、CLM の形態との関係、また、段階的な意味の違いなどは全く述べていない。

3. 譲歩条件・譲歩の CLM と五つのレベルの関係

3.1 五つのレベルの定義

角田 / Tsunoda (2003, 2004, forthcoming) が提案した「節接続とモダリティの階層」の五つのレベルを簡単に紹介する。詳細は角田 / Tsunoda (2003, 2004, forthcoming) を参照されたい。角田 (2011) に簡単にまとめてある。

五段階は、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」の五つのレベルから成る。この階層は、原因・理由、条件、逆接など、さまざまな意味の接続関係について成り立つ。以下に、簡単な定義のみ示す。

I「現象描写」のレベル

このレベルでは、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事 (あるいは事態) と主節で述べる出来事 (あるいは事態) との事態としてのつながりを描く。I「現象描写」のレベルでは、主節は、実際に起きた現象、今ある現象、あるいは一般的な現象、習慣的に起こる現象などを述べる。

II 「判断」のレベル

このレベルでも、I「現象描写」と同様に、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事（あるいは事態）と主節で述べる出来事（あるいは事態）との事態としてのつながりを描く。I「現象描写」との違いは、主節のモダリティが話者の判断を表すことである。主節は、義務、免除、可能、許可、推測、後悔、感情、願望、意志、真偽判断など、話者の判断を表す。（I「現象描写」では、主節は単に出来事を述べるだけである。）

III 「働きかけ」のレベル

このレベルでも、I「現象描写」、II「判断」と同様に、従属節と主節の接続は、従属節で述べる出来事（あるいは事態）と主節で述べる出来事（あるいは事態）とのつながりを描く。しかしながら、I「現象描写」、II「判断」とは異なり、主節が、話し手から聞き手への働きかけを表す。主節は、助言、依頼、警告、勧誘、禁止（～ナ）、命令などを表す。

IV 「判断の根拠」のレベル

このレベルでは、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容が、実際の出来事、事態としてつながっているのではなく、認識上のつながりを表す。このレベルの節の接続として主なものは、従属節が判断の根拠を表し、主節が判断を表すような意味関係が成立する場合である。従属節で述べる内容を根拠として、主節で判断を述べるのである。また、逆接の場合は、従属節の内容から推論できる結論を主節で否定する内容になる場合もある。

V 「発話行為の前提」のレベル

このレベルにおいても、従属節で述べる内容と、主節で述べる内容は、実際の出来事、事態としてつながっているのではない。このレベルでの節の接続の主なものは、主節が発話行為を表し、従属節はその発話行為の前提、前置きを表す関係である。従属節が、主節の発話行為を行うこと自体の前提となる場合である。

なお、メタ言語の (metalinguistic) 用法については、角田 (2011) でも扱っているが、以下に簡単に説明する。

メタ言語の (metalinguistic) 用法とは、V「発話行為の前提」のレベルにきわめて近いものである。(Sweetser 1990: 140-141 参照。)しかし、言語表現そのものに関する用法である。以下、(1)、(2)で示すように、話者が自分の言った言語表現そのものに、注釈を加えている。(1)はグループBのCLMの例である。(2)はグループCのCLMの例である²。以下の例文では、CLMの部分を下線で示す。例文はローマ字ではなく、漢字や平仮名で表記する。そのため、動詞の語根または語幹の一部まで下線で示す場合がある。

- (1) 私たちは否定的とまでは言わないにしても、懐疑的な意見に取り囲まれていたわけです。
(ゴーン, リエス)

² グループBのCLMのメタ言語の用法は、面白いことに、従属節の述語が「言う」という動詞で、しかも例(1)のように、否定形の場合に限られている。肯定形の場合はない。これは、グループCのCLMと対照的である。このことも、グループBの確信度とグループCの確信度の違いに関連があると思われる。しかしながら、紙面の関係で、本論ではこれ以上は述べない。

- (2) 突然（といってもほくはノックの音に気づかなかっただけなのかもしれない）頭に手拭をかぶったばあやがはいってきた。（倉橋）

3.2 五つのレベルにおける譲歩条件・譲歩の CLM の分布

本論では CLM が動詞に接続する場合のみ扱う。名詞などに接続する場合は扱わない。

五つのレベルにおける各グループの CLM の用法の分布を表に示す。メタ言語のレベルも示す。グループ A の CLM は大まかに言って I 「現象描写」から V 「発話行為の前提」のレベルまで用いることができる。グループ B とグループ C の CLM は分布が偏っている。IV 「判断の根拠」および V 「発話行為の前提」のレベルと、「メタ言語」でだけ用いることができる。

表1 譲歩条件・譲歩の CLM と五つのレベル

	I	II	III	IV	V	メタ言語
グループ A						
V-(y)oo=ga	+(*)	+	+	+	+	-
V-(y)oo=to	+(*)	+	+	+	+	-
V-(y)oo=to=mo	+(*)	+	+	+	+	-
V-te=mo	+(*)	+	+	+	+	-
グループ B						
V=ni se-yo	-	-	-	+	+	+(*)
V=ni si-ro	-	-	-	+	+	+(*)
V=ni si-te=mo	-	-	-	+	+	+(*)
グループ C						
V=to=wa i-e	-	-	-	+(*)	+(*)	+*
V=to i-t-te=mo	-	-	-	+*	+*	+*
V=to=wa i-u=monono	-	-	-	+*	+*	+*

表1の中で、星印で示した部分は、譲歩を表す。星印が無いところは、特別な文脈が無いかぎり、譲歩条件を表す。また括弧がついているものは、意味の点で完全に「譲歩」とは言い難い場合である。

なお、グループ A の I 「現実描写」のレベルは本稿では扱わない。上記で述べたようにレベル I では、主節が「実際に起きた現象、今ある現象、あるいは一般的な現象、習慣的に起こる現象」などを述べる。グループ A の CLM を従属節に用いた場合も同様である。グループ A の CLM をレベル I で用いた場合には、譲歩の意味を表す場合もあるし、また習慣、時間の意味を表す場合もある。本論の目的の一つは、譲歩条件と譲歩の関係を述べることである。グループ A の CLM はレベル I で、譲歩ではなく、習慣、時間の意味を表す場合もあるので、本論はグループ A の I 「現象描写」の部分は扱わない。

表1が示すように、グループ A の CLM は、従属節の述語である動詞の活用形（すなわち接尾 -(y)oo または -te）そのものである。また、グループ B の CLM は動詞スルを、グループ C の CLM は動詞イウを含む。

4.1.1 譲歩条件節のタイプ

ここでは (a) 譲歩条件節のタイプを検討する。Haspelmath and König (1998: 563) は、譲歩条件節のタイプに以下の三つをあげ、それぞれ例をあげている。(訳は筆者による。)

a. Scalar concessive conditionals

Even if we do not get any financial support, we will go ahead with our project.

(たとえ財政的援助を得なくても、我々はプロジェクトを進める。)

b. Alternative concessive conditionals

Whether we get any financial support or not, we will go ahead with our project.

(財政的援助を得ようと得まいと、我々はプロジェクトを進める。)

c. Universal concessive conditionals

No matter how much (/However much) financial support we get, we will go ahead with our project.

(どれくらいの財政的援助を得るにかかわらず、我々はプロジェクトを進める。)

Scalar concessive conditionals は「極値譲歩条件」と訳せる。従属節で最も極端な場合を示しておいて、そのスケール上のどの場合においても、主節の内容が成立することを述べる。Alternative concessive conditionals は「選択的譲歩条件」と訳せる。従属節で二者（あるいはそれ以上）の選択的な場合を示す。いくつかの異なった条件のどちらの場合も、主節の内容が成立することを述べる。例えば、同じ述語の肯定形と否定形のペアをあげるような場合である。Universal concessive conditionals は「普遍的譲歩条件」と訳せる。従属節に疑問や不確定性を表す代名詞、副詞、形容詞などを含むような場合であり、その不確定な場合においても主節の内容が成立することを述べる。

どのタイプにおいても、従属節では、ある一つの特定の条件だけではなく、幅のある条件において主節で述べる内容が成立することを述べる。要するに、譲歩条件節は、選択の幅のある条件を提示している。

さらに、筆者の考察では、「選択的譲歩条件」(Alternative) は二つの場合を区別できる。「肯定否定」(Polar) と「併記」(Listing) と呼ぶ。以下に示す。

「肯定否定」(Polar)：同じ動詞を用い、肯定、否定のペアを示す場合。(例は (5) と (6))

「併記」(Listing)：二つ以上の条件を並べて述べる場合。(例は (7) と (8))

- (5) 雨が降ろうが降るまいが、計画は進める。(肯定否定)
- (6) あいつが行こうと行くまいと知ったことではない。(肯定否定)
- (7) 花子は日に焼けようが、ニキビができようが気にもかけない。(併記)
- (8) 雪が降ろうと檜が降ろうと何も変わらない。(併記)

上記のように「選択的譲歩条件」を「肯定否定」と「併記」に分けると、譲歩条件節のタイプは、以下の四つになる。

「肯定否定」(Polar), 「併記」(Listing), 「普遍的」(Universal), 「極値」(Scalar)

この譲歩条件節の分類は $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ と $-(y)oo=to=mo$ の用法の違いに反映している。 $-(y)oo=ga$ は「肯定否定」, 「普遍的」, 「併記」の用法がほとんどである。「極値」の例は比較的少ない⁴。 $-(y)oo=to$ は「普遍的」, 「併記」の用法が多く, 「肯定否定」, 「極値」は比較的少ない。つまり, $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ に共通しているのは, 「極値」の例が少ないということである。一方, $-(y)oo=to=mo$ は, 「肯定否定」には用いず, 「普遍的」, あるいは「極値」の用法で多く用いる。また, 「併記」の用法がときどきある。例は (9) である。

- (9) 人生は一色ではありません。時に, 悲劇のヒロインになろうとも, たとえ, どん底につき落とされようとも, いつまでもそこにとどまることはなく, はいつくばって立ち上がろうとする自分を静かに見つめ, はげまし, 自分の人生に逆らうことなく, 人生の中に埋没しようではありませんか。(栗原)

上で, 「選択的譲歩条件」を「肯定否定」と「併記」に分けることを提案した。この分類は, $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ と $-(y)oo=to=mo$ の用法の違いに見事に反映している。すなわち, $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ は, 「肯定否定」の場合に用いることができる。(5), (6) 参照。) 一方, $-(y)oo=to=mo$ は, 「肯定否定」には用いることができない。(10), (11) 参照。)

- (10) *雨が降ろうとも降るまいとも, 計画を進める。(肯定否定)
 (11) *あいつが行こうとも行くまいとも知ったことではない。(肯定否定)

「極値」の用法では, 従属節の構成要素の中に, 「普遍的」のような不定の意味が入らない⁵。また, 「肯定否定」, 「併記」のように選択的ではなく, 一つの内容に集約している。従って, 「極値」は四つのタイプの中では, 最も内容の確信度が高い。すなわち話者の高い確信度を表すと思われる。

$-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ に極値の例が少なく, $-(y)oo=to=mo$ に「極値」の用法が多い, ということだけを考えても, $-(y)oo=to=mo$ が, $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$ よりも, 話者の高い確信度を表す, と考えることができる。

ただし, $-(y)oo=to=mo$ の実例を見ると, 「極値」の例と並んで「普遍的」の例も多い。また, $-(y)oo=to=mo$ は「肯定否定」に用いないと言っても, 「肯定否定」が「普遍的」, 「併記」と比べて確信度が低いとは言い切れない。そこで, ここでは従属節の四つのタイプと確信度の関係を以下のように示しておく。

⁴ $-(y)oo=ga$ の形は, しばしば以下のような場合に出現する。

(例) これは当然みんなの食後の菓子と思われようが, 龍子は器をとるとそのまま次の間へは行っていった。(北)

(例) いや, 個人的な原因で侮られるなら我慢できようが, 日本人としてだったら許さん。(藤原)
 この場合の $=ga$ は, 譲歩条件ではなく, 逆接の意味である。

⁵ ただし, タトエ, イカニといった副詞を従属節全体にかかる文副詞として用いる場合は, 「極値」の例とみなす。特にイカニは, 不定の意味を含んではいるが, この場合は, 譲歩条件の意味そのものと呼応すると考えられるからである。英語で言えば, even if の even にあたるような意味である。(例 (9) 参照。)

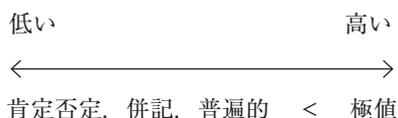


図4 譲歩条件節の四つのタイプの確信度

上で、 $-(y)oo=ga$ 、 $-(y)oo=to$ と $-(y)oo=to=mo$ を「肯定否定」、「普遍的」、「併記」、「極値」のどれに用いるか、用いないかを述べた。その結果を図4に加えると、図5になる。

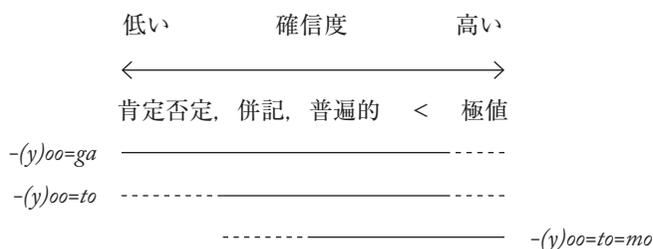


図5 グループA：CLMと従属節の四つのタイプ

4.1.1節では、第4節のはじめにあげた、(a) 譲歩条件節のタイプを検討した。4.1.2節では、図5に関連して、(b) 主節の意味の違いを見る。

4.1.2 主節の意味の違い

実例を見ると、 $-(y)oo=ga$ 、 $-(y)oo=to$ 、 $-(y)oo=to=mo$ を用いる場合、主節に表れる意味の中には、大まかに二つのタイプがある。一つは、主節で「どうでもよい」、「構わない」、「大した違いはない」といった消極的、無関心な態度が表れる場合である。もう一つは、何かを「達成する」、「成就しなくてはならない」といった、積極的、意志貫徹的な意味が表れる場合である。二つのタイプによって、 $-(y)oo=ga$ あるいは $-(y)oo=to$ を用いる場合、また $-(y)oo=to=mo$ を用いる場合で、使い分けがある。

実例には、 $-(y)oo=ga$ 、 $-(y)oo=to$ 、 $-(y)oo=to=mo$ のいずれを用いても、二つのタイプのそれぞれの意味を表せるような例文はみつかるとは限らない。しかしながら、傾向としては、 $-(y)oo=ga$ 、 $-(y)oo=to$ は、「消極的、無関心」タイプに多く用い、 $-(y)oo=to=mo$ は、「積極的、意志貫徹」タイプに多く用いる⁶。以下に実例をあげる。言い換えると明らかに不自然になる場合もある。なお、図5に示したように、 $-(y)oo=to=mo$ は「肯定否定」では用いないので、例は「極値」((14), (16))、「普遍的」((13), (15), (17))、「併記」((12), (13), (18))の例をあげる。(| } 内に言い換えた場合を示す。

⁶ 筆者の観察では、特に、 $-(y)oo=ga$ の「肯定否定」の場合には、主節で「消極的、無関心」タイプの意味が表れる傾向がある。国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下『BCCWJ』)で調べたところ、 $-(y)oo=ga$ の「肯定否定」の例をとって、最初の50例をみると、半分以上に「関係ない」、「どうでもよい」といった消極的な言葉が主節に現れ、また主節の大半が消極的な意味を表していた。

最初に示したものが元の形で、「／」の後の形は筆者が比較のためにつけ加えたものである。）

「消極的，無関心」タイプの例

- (12) もちろん、私が |腹をたてようが、顔をそむけようが／*腹をたてようとも、顔をそむけようとも |，それは大したことではない。(沢木)
- (13) 彼がどこで |生きようと死のうと／*生きようとも死のうとも | 私の知ったことではないわ。(森村)
- (14) 成功した時のことを願って、それをしているのではない。もう、どうにも想像しているモヤモヤから開放されたいのだ。失恋し |ようが／*ようとも | 構いはしない。もう言うっきゃないのである。(大沼)
- (15) それがどう出 |ようと／*ようとも |，それだけのことではないか。(司馬)

「積極的，意志貫徹」タイプの例

- (16) たとえ、この身が諸々の苦難にさいなまれ |ようとも／*ようが／?ようと |，精励して修行を続けて耐え忍び、決して悔いることはないでしょう。(中西)
- (17) どのようなことがあ |ろうとも／*ろうが／?ろうと |，命がけて逆賊どもをけちらし、必ず宮殿を守ってみせます。(ドラマ『イ・サン』)
- (18) われわれの行為は、それが |死に至ろうとも生に恵まれようとも／*死に至ろうが生に恵まれようが／?死に至ろうと生に恵まれようとも |，キリスト教徒としての義務をまっとうすることに発していた。(塩野)

「消極的，無関心」タイプは、従属節で述べることについて、話者、あるいは文中の人物の関心が無いことを表す。従属節で述べることが実際に起きるか起きないかについては、特に確信があるかどうかを問題にしていない。あるいは、たとえ確信があってもそれを示さない。

一方、「積極的，意志貫徹」タイプは、話者、あるいは文中の人物が何らかの困難、障害を予測している場合に現れる。その困難、障害を強く意識しながら、主節では、話者が行うべきことへの強い決意を表す。(17) のように、「必ず」という強い確信を表す副詞も現れる。

従って、「積極的，意志貫徹」タイプは、「消極的，無関心」タイプより従属節で述べる事態へのより高い確信度を表すと言える。上述のように、 $-(y)oo=ga$ 、 $-(y)oo=to$ は「消極的，無関心」タイプに多く用い、 $-(y)oo=to=mo$ は「積極的，意志貫徹」タイプに多く用いる傾向がある。即ち、この二つのタイプの使い分けに関して、 $-(y)oo=to=mo$ の方が $-(y)oo=to$ 、 $-(y)oo=ga$ よりも、表す確信度が高いと言える。

以上、(a) 譲歩条件節のタイプ (4.1.1 節)、(b) 主節の意味の違い (4.1.2 節) から、 $-(y)oo=to$ 、 $-(y)oo=ga$ よりも、 $-(y)oo=to=mo$ のほうが、より高い確信度を表すと考えられる。このことは(3)で示した階層を裏付ける。

なお、このことは、形態の違いとも相関があると思われる。 $-(y)oo=to$ 、 $-(y)oo=ga$ に比べて、 $-(y)oo=to=mo$ のほうが形態が重い。 $-(y)oo=to=mo$ が「極値」の用法に用いやすいこと、また、積極的

な強い意志を表す文に用いることも、形態の重さと何らかの関連があると思われる。また、図5で示したように、 $-(y)oo=to=mo$ を「極値」と「普遍的」で多く用いることも、やはり形態が重いゆえに、「肯定否定」、「併記」のような、二つの条件を並べる場合を避けるからかもしれない。

4.2 CLM $-(y)oo=to=mo$ と $-te=mo$

以下では、(4)で示した、 $-(y)oo=to=mo < -te=mo$ の階層を検討する。この二つのCLMは、動詞の活用形が異なる。これらの意味と用法を考察するためには、第4節のはじめにあげた、(c)譲歩条件節と主節の時間関係を見る必要がある。

4.2.1 譲歩条件節と主節の時間関係

譲歩条件節で表れる事態と主節で表れる事態の時間関係に関して二つのタイプがあることを角田(2006a: 196)が指摘した⁷。(これは、五つのレベルにおいて特にII「判断」とIII「働きかけ」にあてはまる。)この二つのタイプをそれぞれ「順行」、「逆行」と呼ぶ。

「順行」：従属節で述べる事態が起こり、その後主節で述べる事態が起こる。(例(19))

「逆行」：結果として従属節で述べる事態が起こる前に、主節で述べる事態が起こる。(例(20))

(19) 雨が降ろうが雪が降ろうが、かまわず練習を続けた。(順行)

(20) たとえ死んでも任務をまっとうしなければならない。(逆行)

ここでは、わかりやすいように、 $-(y)oo=to=mo$ と $-te=mo$ について、「極値」の場合を比べる。 $-(y)oo=to=mo$ を用いても、 $-te=mo$ を用いても、両方とも「順行」、「逆行」のそれぞれの意味を表すことができる。しかしながら、 $-(y)oo=to=mo$ のほうが、「逆行」の意味を表しやすい。例を示す。

(21) あなたが破いて捨てようとも、私は手紙を書きます。

(22) あなたが破いて捨てても、私は手紙を書きます。

(23) 明日の試合に負けようとも、全力を尽くします。

(24) 明日の試合に負けても、全力を尽くします。

(21)と(22)を比べると、(21)は、「順行」の意味とも解釈できないことはないが、「逆行」の意味と解釈しやすい。すなわち、「破いて捨てる」ことを結果として解釈しやすい。一方、(22)は、「逆行」の意味とは解釈しにくい。「順行」、すなわち「破いて捨てる」ことの後に「新しい手紙を書く」という意味である。

(23)と(24)も同様である。(23)は、「逆行」の意味に解釈しやすい。すなわち、「結果的に負ける」かもしれないが、とにかく「全力を尽くす」という意味である。一方、(24)は「逆行」の意味とは解釈しにくい。「順行」、すなわち「明日の試合に負ける」という事態が起きても、そ

⁷ 角田(2006a: 197)では、(21)のような「逆行」の文をV「発話行為の前提」のレベルと解釈していた。訂正する。

の後もさらに「全力を尽くす」という意味である。

すなわち、*-te=mo* を用いる場合のほうが、*-(y)oo=to=mo* を用いる場合よりも、従属節の内容が確定したことを表す、と言える。これは、話者の確信度の反映である。

以上、(c) 譲歩条件節と主節の時間関係から、*-(y)oo=to=mo* より *-te=mo* のほうが高い確信度を表すことを述べた。これは (4) で示した階層を裏付ける。

このことは、動詞の形態、意味とも関係があると思われる。動詞の *-(y)oo* 形は、未実現のことを表す形である。一方、*-te* 形は未実現のことも表せるが、既実現のことも表せる。未実現のことを表す形ではなく、既実現を表せる形を確信度の高い方に使っている。

4.2.2 「順行」、 「逆行」 と先行研究

Haspelmath & König (1998: 569) は、従属節の表す事態と主節の表す事態の間の時間関係の制限について述べている。条件文におけるテンスの制限、すなわち従属節で表す事態が生じた後に主節で表す事態が生じるという関係は、content domain (筆者が提案した五つのレベルの I 「現象描写」 から III 「働きかけ」 のレベルにあたる) だけにあてはまり、epistemic domain, illocutionary level (speech-act level) (それぞれ IV 「判断の根拠」、V 「発話行為の前提」のレベルにあたる) では、あてはまらないと述べている。また、譲歩条件についても同様であるとしている。

Sweetser (1990: 128) は条件文について、content domain の文は「仮定性」があり、epistemic domain, speech-act domain の文は「前提性」があることを述べている。(角田 2004: 59-60 参照。) 角田 (2004: 62) は、日本語の場合、epistemic domain の文においても、CLM の違いで、仮定であるか前提であるかの違いを表すことができることを述べた。Sweetser は、譲歩条件については、「仮定性」、 「前提性」については、特に詳しく述べていない。

さて、本論で述べている「逆行」の文について考える。(21) から、(24) にあげた例文はすべて II 「判断」のレベルの文である。このうち、(21) と (23) は逆行の意味に解釈しやすい。すなわち、content domain にも時間関係が逆になる場合があるのである。日本語では、epistemic domain でもなく、speech-act domain でもないところに「逆行」の意味が表れ、また「順行」と「逆行」を CLM の違いで言い分けられるのである。

5. グループ B の CLM

まず 5.1 節で、グループ B の CLM (*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo*) が、グループ A の CLM (*-(y)oo=ga*, *-(y)oo=to*, *-(y)oo=to=mo*, *-te=mo*) よりも話者の高い確信度を表すことを意味と形態の面から述べる。次に 5.2 節以下で、*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* が話者の確信度の違いを表すことを述べる。なお、グループ B の CLM と形態が似ている CLM, *=to si-te=mo* がある。*=to si-te=mo* は、グループ B の CLM とは形態だけでなく、意味・用法も異なることを 5.3 節で述べる。

5.1 グループ A とグループ B の確信度の違い

表 1 で示したように、グループ B の CLM は五つのレベルにおいて、I 「現象描写」、II 「判断」、

III「働きかけ」のレベルを表すことはできない。しかしIV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」および「メタ言語」のレベルの用法がある。後者のレベルの用法に共通するのは、従属節の内容を前提化する、ということである。一方、I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」のレベルは出来事と出来事のつながりそのものを述べる。

グループAのCLMを用いても、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」のレベルの意味を表すことができる。(表1参照。)しかしながら、グループBのCLMを用いる場合と比べて違いがある。IV「判断の根拠」のレベルの例文を用いて、グループAとグループBを比較する。

- (25) そうと知ら なかろうが/なかろうと, 彼が薬を運んだのだ。(A)
 (26) ?そうと知らなかろうとも, 彼が薬を運んだのだ。(A)
 (27) そうと知らなくても, 彼が薬を運んだのだ。(A)
 (28) そうと知らなかつた にしろ/にせよ, 彼が薬を運んだのだ。(B)
 (29) そうと知らなかつたにしても, 彼が薬を運んだのだ。(B)

(25), (26), (27) では、例文にやや不自然さがある点を別にしても、従属節で述べていることが、真であるか、偽であるかは文を見ただけではわからない。また、従属節で述べていることを前提として述べているのかも曖昧である。一方、(28), (29) でもやはり、従属節で述べていることが真であるか、偽であるかはわからない。しかしながら、(28), (29) では、従属節で述べていることを仮に真であるとして、主節を述べている。即ち、従属節で述べていることを「前提化」している。

形態の面では、*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* はすべてスルという動詞を含む。従属節の内容を「前提化」するのは、スルの働きである。

また、*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* に前接する「知らなかった」という動詞の形態は過去のテンスを含んでいるので、事態が確定していることを表せる。こうして、(28), (29) では、「知らなかった」ことを「仮に確定したこととして前提とする」という意味を表す。しかしながら、AグループのCLM, *-(y)oo=ga*, *-(y)oo=to*, *-(y)oo=to=mo*, *-te=mo* は、そもそもテンスを表すことができない。従って、(25), (26), (27) では、「仮に確定したこととして前提とする」といった意味を明確に表すことができない。

以上、意味、形態の面から見て、グループAのCLMよりもグループBのCLMのほうが話者の高い確信度を表すことができると結論できる。

5.2 グループBのCLMの確信度の違い

5.2.1 はじめに

グループBのCLMの表す確信度の違いは次ページ図6のように示せる。

違くない。(c) 場合) (石川)

5.2.2.2 譲歩条件節のタイプ

=ni se-yo, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* について, 4.1.1 節で述べた, 譲歩条件節の四つのタイプがここでも関係する。「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」, 「極値」である。これらの三つの CLM の実例を見ると, 「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」, 「極値」のすべてのタイプで用いる。しかしながら, コーパス (国立国語研究所, 『BCCWJ』) を見る限り, *=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* すべてにおいて, 「肯定否定」が少なく, 「極値」が多いという傾向が共通に見られる。また, *=ni si-te=mo* は, 「肯定否定」の用法が極めて少なく, 「普遍的」, 「併記」の用法も少ない。圧倒的に「極値」の用法が主になっている。一方, *=ni se-yo*, *=ni si-ro* の場合は, 「極値」の例も多いものの, *=ni si-te=mo* に比べると, 「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」の例の割合が高い。

すでに, 4.1.1 節で述べたように, 「極値」の例は, 「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」よりも内容の確信度が高い。すなわち, 話者の高い確信度を表すと言える。従って, *=ni si-te=mo* は圧倒的に「極値」の用法で用いるので, *=ni se-yo*, *=ni si-ro* に比べて, 高い確信度を表すと言える。図 6 が成り立つ。

以下, これらの三つの CLM について, 四つのタイプの例をあげる⁸。

〈*=ni se-yo* の例〉

- (36) 自由な存在即ち一個の文化人としてのみ私は, いわゆる社会の中で活動するにせよしないにせよ, 全宇宙と無限の関係に入るのである。(「肯定否定」) (三木)
- (37) 私はどのような結果が出るにせよ, 一審の判決を受け入れる覚悟でおりました。(「普遍的」) (永瀬)
- (38) 「脅迫されたにせよ, 口止めされたにせよ, 犯人は岡みどりへ近づくに違いありません。金をやろうとするか, 殺そうとするか……。ともかく, そのときがチャンスです!」(「併記」) (赤川)
- (39) 蛭たちは我々とは逆の方向に避難したらしかった。私はなんとか最悪の部分のをりきることができたのだ。たとえここで出水に襲われて死んでしまうにせよ, 蛭の穴に落ちて死ぬよりはずっとましだ。(「極値」) (村上『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』)

〈*=ni si-ro* の例〉

- (40) しかし, 大学に行くことが人生にとって不可欠の条件という訳ではちっともないし, 卒業するまで一度も彼女と言葉を交わしたことのなかった僕にとって, 彼女が大学に行くにしろ, 行かぬにしろ, その理由を問いただしたり, 将来の展望についてあれこれ訊ねる機会は全くなかった。(「肯定否定」) (日高)
- (41) 旅行傷害保険 どこにいくにしろ, 加入しておくべき (「普遍的」) (スティルウェル)

⁸ *=ni si-ro* は, 名詞に後接する用法が多い。(角田 2006a 参照。)

んにしろ」「なんにしても」といったマーカーの一部になる。これは、いわば「普遍的」の用法に対応する。

一方、*=ni si-te=mo* のみ、「それ」という確定的な意味を表す場合に、「それにしても」というマーカーの一部になる。これは、いわば、「極値」の用法に対応する。*=ni se-yo*, *=ni si-ro* は、今日では「それにせよ」「それにしろ」という形では用いない⁹。

「選択的」あるいは「何」という不確定的な意味を表す表現よりも、「それ」という確定的な意味を表す場合は、表す確信度が高いと言える。従って、文連接マーカーの中での用法を見ても、*=ni si-te=mo* のほうが *=ni se-yo*, *=ni si-ro* よりも確信度の高いことを表すと言える。

以上、(a) 譲歩条件節のタイプ (5.2.2.2 節), (b) 文連接マーカーとしての違い (5.2.2.3 節) から、*=ni si-te=mo* のほうが *=ni se-yo*, *=ni si-ro* よりも話者の高い確信度を表すと言えることを述べた。図 6 が成立する。

確信度の違いは、それぞれの形態も関係している。*=ni se-yo*, *=ni si-ro* に含まれる動詞スルの活用形は、両方とも命令形である。すなわち、未実現のことを表す形である。一方、*=ni si-te=mo* に含まれる活用形はいわゆるテ形である。4.2.1 節で見たように、*-te* 形は未実現のことも表せるが、既実現のことも表せる。*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo* の場合も、未実現のことを表す形ではなく、既実現を表せる形を確信度の高い方に使っている。

5.3 *=to si-te=mo*

グループ B の CLM (*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo*) と形の似た CLM *=to si-te=mo* がある。*=to si-te=mo* は、グループ B の CLM と同様にスルの活用形を含む。しかし、以下に述べるように、グループ B の CLM とは形の面でも意味・用法の面でも違いがある。従って、*=to si-te=mo* はグループ B に入れない。

形の面では、*=to si-te=mo* はグループ B の CLM (*=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo*) とは違って、助詞 *=ni* ではなく、*=to* が付いている。

意味・用法の面でも違いがある。主な違いを述べる。以下の (a), (b), (c) である。

(a) 基本的に、「肯定否定」「普遍的」の用法がない。「併記」の用法は可能ではあるが、ほとんどない。(50) は『新潮文庫の 100 冊』(以下『新潮 100 選』)の中に珍しくあった例である。「極値」の用法が中心である。例を示す¹⁰。

(48) *コンテストに入賞できたとしてもできなかったとしても, それからが大変だ。(肯定否定)

(49) *どんな問題があったとしても, それは口外できない。(普遍的)

⁹『新潮 100 選』で調べたところ、志賀直哉 (1883 年生まれ) の作品の中にのみ七つ「それにしろ」の用例があった。しかし、他の作家ではみつからなかった。

¹⁰ 厳密に言うと、ここで言う「普遍的」とは、「誰」「何」といった不定な意味を表す名詞が述語の項になる場合である。「いかに」「どんなに」など、不定の意味を持っていても、副詞は *=to si-te=mo* 節の中でも用いる。また、「何か」「どこか」といったように「か」の付く場合は *=to si-te=mo* 節に含まれることがある。これは、「何」「どこ」が完全に不定、不特定な意味を持つのに対し、「何か」「どこか」は、不定ではあるが特定があることによると思われる。

- (50) 民青を支持したとしても、反民を支持したとしても、どっちにしろ批判と非難はうける。(併記) (高野)
- (51) 彼女に恋人ができたとしても、仕方のないことだ。(極値) (沢木)

(b) $=to\ si-te=mo$ は、架空のある事態を想定して、そのことを前提に主節を述べることができる。また、 $=to\ si-te=mo$ は、「もし」という副詞とも共起する。 $=ni\ se-yo$, $=ni\ si-ro$, $=ni\ si-te=mo$ では、架空のある事態を想定する、という意味は表さない。

- (52) そう、たとえばもし徹吉がいた {としても／*にせよ／*にしろ／*にしても}、あの人はお父様とはまるで逆の性格ですが、もちろん賛成しはしなかったでしょう。(北)

(c) $=to\ si-te=mo$ は条件を表す CLM, $=to\ su-ru=to$, $=to\ su-reba$, $=to\ si-tara$ などと共通点がある。形態的には、すべて「 $=to$ + 動詞スルの活用形」を含んでいる。意味の面では、譲歩条件、条件という違いがあっても、「条件」を表すことは共通している。

一方、 $=ni\ se-yo$, $=ni\ si-ro$, $=ni\ si-te=mo$ に対応する $=ni\ su-ru=to$, $=ni\ su-reba$, $=ni\ si-tara$ という形態、すなわち、「 $=ni$ + 動詞スルの活用形」の場合を見ると、まず、 $=ni\ su-ru=to$ という CLM はない。 $=ni\ su-reba$, $=ni\ si-tara$ という CLM は存在するが、名詞に後接し、視点の移動を表す用法があるものの、動詞に接続する用法がない。すなわち、 $V=ni\ se-yo$, $V=ni\ si-ro$, $V=ni\ si-te=mo$ の表す意味は条件を表す CLM には、並行的には存在しない。本論の述べる CLM の形態と確信度の連続的な相関は、譲歩条件という意味のカテゴリーに特有なものと思われる。

以上の (a), (b), (c) の考察から、 $=to\ si-te=mo$ は「条件」の意味を強く表し、話者の「確信度」を表すという機能とは別の働きを持つと考える。従って、グループ B とは別扱いたした。

6. グループ C の CLM

ここでは、グループ C の CLM, すなわち、 $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$, $=to=wa\ i-u=monono$ を扱う。まず 6.1 節でグループ C の CLM がグループ B の CLM よりも高い確信度を表すことを述べる。次に 6.2 節以下で、グループ C の CLM の表す確信度の違いを述べる。

6.1 グループ B とグループ C の確信度の違い

グループ A の CLM (図 5 参照) とグループ B の CLM (図 7 参照) は、「肯定否定」, 「普遍的」, 「併記」, 「極値」の四つの用法がある。しかし、グループ C の CLM, すなわち $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$, $=to=wa\ i-u=monono$ は、そうではない。ほとんどすべて「極値」の用法しかない。 $=to=wa\ i-e$ については、何らかの強調の意味で「併記」の例が出現することもある。しかし、 $=to\ i-t-te=mo$ は、用法から考えても「併記」は不自然である。また、 $=to=wa\ i-u=monono$ は併記の実例がみつからなかった。(53) は、『新潮 100 選』の中に一つだけあった $=to=wa\ i-e$ の「併記」の例である。

- (53) 彼の顔立ち、その姿全体には、いくら榆病院の後継ぎと定められているとはいえ、また少年時代から言葉ものごしを基一郎夫妻にきびしくしつけられてきたとはいえ、どこか消し

がたい素朴さ, よくいえば誠実で, わるくいえば田舎じみた朴訥さがこびりついていた。(併記) (北)

「極値」の用法とは, すでに述べたように「肯定否定」, 「併記」のように選択的ではなく, また「普遍的」のように不確定な意味を含まない。「極値」の用法が中心であるということは, グループ C の CLM が, グループ A, グループ B の CLM よりも話者の高い確信度を表すことを示す。以上のことを図 8 に示す。

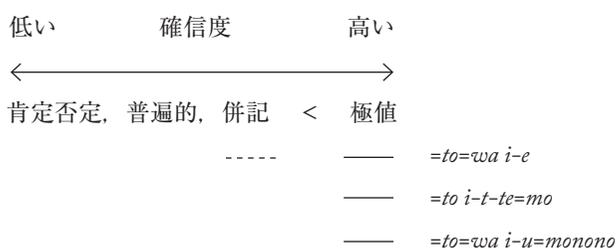


図 8 グループ C : CLM と従属節の四つのタイプ

6.2 グループ C の CLM の表す確信度の違い

6.2.1 はじめに

グループ C の CLM も, それぞれ表す確信度に違いがある。さらに, グループ C の CLM の中には, 譲歩条件だけでなく, 譲歩を表せるものがある。また, 譲歩条件は表さず, 譲歩しか表さないものもある。図 9 のようにまとめられる。

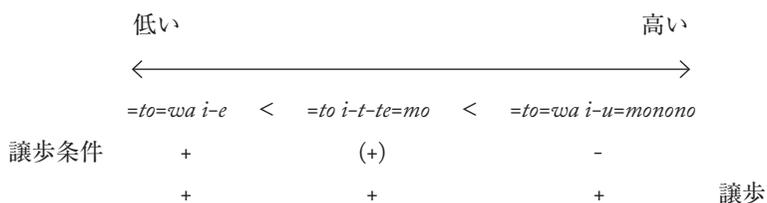


図 9 グループ C : CLM の表す確信度

図 9 に示したことには, 以下の二つの事柄が関係する。

- (a) 従属節の表す意味の違い (6.2.2 節)
- (b) 副詞 (タトエ, イカニなど) との共起 (6.2.3 節)

グループ C の CLM は, 譲歩条件と譲歩の接点を表す。「譲歩条件」と「譲歩」の違いは, 従属節の内容を確定したものとして表すか否かに関わる。例えば, König & Siemund (2000: 343) は, ‘concessive conditionals typically develop into genuine concessive or may at least be used as such whenever the truth of the antecedent is contextually given.’ (譲歩条件は典型的には前件 (従属節) の確実性が文脈から与えられる場合はいつも純粋な譲歩あるいはそのようなものに変化する。) と述べてい

る。すなわち、「譲歩」が従属節で表す内容を確定したこととして述べるのに対し、「譲歩条件」は、従属節で表す内容を、確定していないこととして述べる。譲歩の方が譲歩条件より表す確信度が高い。(このことは、図9に示してある。)

グループCのCLMのうち、*=to=wa i-e*には、譲歩条件と譲歩の用法がある。つまり、文脈から確信度が生じる場合と生じない場合の両方の場合に用いる。*=to i-t-te=mo*は、基本的に譲歩の意味で用いるが、タトエ、イカニという副詞と共に起する点において、譲歩条件の意味も多少ある。(6.3節参照。) *=to=wa i-u=monono*には、譲歩条件の意味はまったく無く、譲歩を表す。もっぱら確定した内容を述べる。

6.2.2 従属節の表す意味の違い

6.2.2.1 はじめに

グループCのCLMを用いる場合、従属節は以下のようなことを表す。

(a) 客観的に事実かどうかかわからないが話者の判断を述べる場合、あるいは話者の判断において仮に真とする内容。

(b) 他人は知らなくても、話者が事実だと知っていること。

(c) すでに誰かが言ったことなど、前の文脈から、話者(書き手)と聞き手(読み手)の間で、共通に真と認識し、客観的事実となっていること。

(d) 前の文脈というよりも、誰でも知っているような一般的な事柄、普遍的な事実、あるいは思い込みとなっていること。

つまり、(a)、(b)は話者個人の判断による一方、(c)、(d)は、他者と共有し、客観性を帯びるという違いがある。確信度という観点から考えると、(a)から(d)の順番で、確信度が強まると言える。

ただし、(a)を表すのは、*=to=wa i-e*のみである。また、*=to i-t-te=mo*は、(c)の用法が主であり、同時にトピックの指示に関わる特殊な用法がある。(d)は、*=to=wa i-u=monono*が最も表しやすい。それぞれのCLMの表す意味を図10に示す。

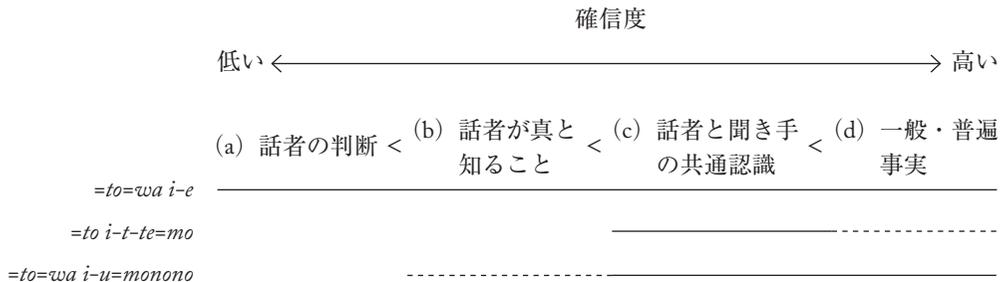


図10 グループC：CLMの用法と確信度

以下、それぞれのCLMの意味と用法を検討する。

6.2.2.2 =to=wa i-e

=to=wa i-e が、=to i-t-te=mo、=to=wa i-u=monono と異なるのは、文脈の中で、客観的な事実となっていないこと、(a)「客観的に事実かどうかかわからないが話者の判断を述べる場合、あるいは話者の判断において仮に真とする内容」に従属節で述べることができるという点である。この特徴は、グループ B の CLM とも共通な点である。(5.1 節参照。) 例をあげる。

(54) どうせ「彼女」から心の底まで見透されているとはいへ、せめて表面だけでも「彼」から力づくで奪われる形をとった方が少しでも「彼女」の腹立ちを和らげることになったのではないか。(話者の判断) (筒井)

(54) の「どうせ…」という、=to=wa i-e 節の内容は客観的事実ではない。話者の判断による内容である。この文では、=to i-t-te=mo、=to=wa i-u=monono は使えない¹¹。この点で、=to=wa i-e は他の二つの CLM と比べると、より確信度の低い内容を表すことができると言える。

さらに、=to=wa i-e は、上記の (b) から (d) のすべてを表すことができる。以下に例を示す。

(55) 五千万円の国民政治協会への政治献金返還請求について 検察による取り調べが始まったとき、KSD の理事長だったわたしはこの政治献金問題については責任者として応えなくては行けないと考えました。わたしが知っていること以外はわたしのせいじゃないとは言えません。部下がやったことを知らなかったとはいへ、責任者のわたしの不徳の致すところ、これは腹をくくろうと解明に協力しました。(b) 話者が真と知ること (古閑)

(56) 真田昌幸は、石高わずかに三万八千石の小大名に過ぎない。それでいて三成は、上記のような理由・関係にあったとはいへ、昌幸に連日のように書状をおくったばかりか、家康との戦いに勝利した暁には、甲斐・信濃・上野の三カ国を恩賞としてつかわず、といった約束までした形跡があった。(c) 話者と聞き手の共通認識 (加来)

(57) 私は、二十一世紀クラブの金子でございます。新しい世紀を迎えたとはいへ、農林水産業にとって非常に厳しい状況が続いていることは御承知のことです。(d) 一般・普遍事実 (国会会議録 2001)

6.2.2.3 =to i-t-te=mo

-te=mo は譲歩条件を表す CLM である。グループ A に属す。(4.2 節参照。)
「といっても」という表現は二つの用法に分けることができる。(i) 動詞イウが文字通りの「言う」という意味を持つ場合。この場合は、-te=mo (譲歩条件) だけが CLM である。(ii) =to i-t-te=mo 全体が CLM である場合。動詞イウが文字通りの「言う」という意味を表すのではなく、より抽象化した意味を表す。

¹¹ 厳密に言えば、(54) の例の場合、「どうせ「彼女」から心の底まで見透かされている」という部分が、文脈上、誰かが言った発言内容の引用である場合は、=to i-t-te=mo も使えると思われる。また、「どうせ「彼女」から心の底まで見透かされている」ということが誰でも知っているような客観的事実であれば、=to=wa i-u=monono を用いることもできるであろう。しかし、(54) の例には、そのような含みはない。

まず、動詞イウが文字通りの「言う」という意味を持つ場合を見る。五つのレベルの例をあげる。

- (58) 太郎は、「馬鹿」と言っても怒らなかった。(I「現象描写」)
 (59) 太郎は、「馬鹿」と言っても怒らないだろう。(II「判断」)
 (60) 私が「馬鹿」と言っても怒らないでくれ。(III「働きかけ」)
 (61) 太郎が辞めるなど言っても、すでに花子の辞職は決定しているようだ。(IV「判断の根拠」)
 (62) 誰が何と言っても、これが真実だ。(V「発話行為の前提」)

(58) から (62) の例では、従属節の「言う」という動詞は、文字通りの「言う」という意味を表し、誰の発言かということも明確になっている。

次に、 $=to\ i-t-te=mo$ 全体が CLM である場合を考察する。この用法は、(58) から (62) に表れる譲歩条件の文と連続体にあるとは考えられるものの、動詞イウは文字通りの意味ではない。 $=to\ i-t-te=mo$ 全体が一つの CLM を形成すると見るのが妥当である。談話の流れの中で、従属節で述べることを前提化するような働きがある。

従属節が表す内容としては、(c) すでに誰かが言ったことなど、前の文脈から、話者(書き手)と聞き手(読み手)の間で、共通に真と認識し、客観的事実となっていることが中心である。しかし、例は少ないが、図 10 に示したように、(d) の一般・普遍事実を表す場合もある。以下にまず、(c) の例をあげる。下線は、CLM だけに付けるのではなく、以下の考察で関係のある部分にも付ける。例文 (63) は「入院した方がよいか」という問い (Q) と、それへの答え (A) である。

- (63) Q 三十八(手術は外来か入院か) 白内障手術は外来で簡単にできるそうですが、入院した方がよいとも聞きます。どちらがよいのですか。

A「簡単にできる」手術というのは誤解 大事なことですが、「簡単にできる」手術はありません。また、誤解されている方も多いのですが、外来手術と入院手術との内容に差はありません。外来でできるといっても、診察室の横でしてしまうわけではなく、ちゃんとした手術室に入って行なわれます。同じ手術なのになぜそんな誤解が生まれるのでしょうか。おそらく、外来手術の場合は入院準備をしなくて済み、いつもと違う生活を強いられる負担がないことから、「日帰り手術は制約が少ない」＝「手術が簡単」という印象を受けてしまうからだと思います。(c) 話者と聞き手の共通認識(廣辻)

- (64) 扇田克也「アメノヒモアル」(千九百九十一年) 現代ガラスのコレクション 現代ガラスのコレクションはどこまで進んだのだろうか。日本の美術館ではまだあまり増えてはいないようだが、しかし、個人コレクションは着実に増えてきている気配だ。このところ専門ギャラリーとして積極的に活動している「ギャラリー仲摩」に聞いてみると、なかなか、言いながら、しっかり固定客をつかんでいるようだし、ヤマハの「グラス・ナウ」を企画している側の忙しさをみていると、これもまた結構な状況のように見受けられる。ただし、ほんとうのところはまだよく分からない。確かにコレクターが増えてきたといっても、まだまだ数は知れているということだろうか。水戸にある原画廊は以前からポツポツと現

代ガラスも扱ってきたところだが、その影響もあってか、つくば市に支社を置いている関彰商事でも近年、現代ガラスのコレクションを始めたようである。(c) 話者と聞き手の共通認識 (武田)

(63), (64) が示すように, *=to i-t-te=mo* は、実際に前の文脈で述べている事柄, すなわち話者 (書き手) と聞き手 (読み手) が共通に真と認識している内容を受け, そのことを前提として, 主節で話者の判断, コメントを述べる場合に用いる。さらに, 文として近いところに出現しない場合でも, 話者, 聞き手の間に, 共通の認識が成立している内容を前提とする場合にも用いる。

また, (d) 一般・普遍事実を表す場合とは, 以下の例のような場合である。

(65) ひとつの職場にひとりくらいは真面目にきばき仕事をこなしている人が存在する。そういう人がいないと, いくらイタリアが気楽な国だとしても, やはり国家というものは存続しえない。(d) 一般・普遍事実 (村上『遠い太鼓』)

=to i-t-te=mo はイウという動詞を含むものの, 誰かが具体的に何かを言ったということを問題にするというよりも, 文脈上, 従属節に表れる内容が客観的事実となっている, ということを表す。「anaphoric なトピック指示」とでも呼べるような働きである。

6.2.2.4 *=to=wa i-u=monono*

ここで扱う *=to=wa i-u=monono* は, 逆接の CLM, *=monono* が「言う」という動詞に後接する場合の文字通りの意味と連続体にあると思われるが, イウの意味がより抽象化した場合である。そこで, *=to=wa i-u=monono* として, 逆接の CLM *=monono* とは別の CLM として扱う。*=to=wa i-u=monono* は, 本論で扱う他の CLM とは違い, 譲歩条件は表さず, 譲歩を表す¹²。

従属節の内容はつねに確定したことを表している。さらに細かく言うと, (i) 客観的な事実, (ii) 話者の強い確信, (iii) 比較的長い間あれこれ考えめぐねて結論に達しても, やはり納得できない心の葛藤 (角田 (2006b: 125-123) 参照) といった意味を表すと思われる。つまり, 図 10 で示したように, *=to=wa i-u=monono* は, (b) 話者が真と知ること, (c) 話者と聞き手の共通認識, (d) 一般・普遍事実などを表す。さらに, *=to=wa i-e* と比べると, 同じような場合に用いても, より強い意味を表す。

以下, *=to=wa i-u=monono* について, (b), (c), (d) の例をあげる。

(66) 筆者は丁度その頃, 動脈硬化のために倒れ, 幾らか回復したとはいうものの, まだ時々めまいがしたので, 原稿執筆段階では十分な史料解説を書くことができなかった。自宅療養中に, 渡辺隆先生からは御見舞の電話を頂戴して恐縮した。(b) 話者が真と知ること (佐久間)

(67) いま欧亜局長が答弁されましたように, 逐次話し合いでもって解決されているとはいうも

¹² 角田 (2011) は, *=monono* が, 逆接の中でも restrictive (限定) を表す CLM であると分析した。また, restrictive と譲歩条件は意味に接点があることも述べた。本論で言う「譲歩」とは, 「逆接」の下位分類の *denial of expectation* (予測の否定) を表すものではなく, 文字通りの「譲歩」という意味である。

の、しかし現実的には依然としてわれわれの目を疑うような、これでいいんだろうかという解決の方法がとられている。この点についてはどうですか。((c) 話者と聞き手の共通認識) (国会会議録 1979)

- (68) ひとたび生み出してしまった放射能は固有の寿命で減衰するとはいうものの、原発の閉鎖後も放射性廃物として子孫に残す以外ない。((d) 一般・普遍事実) (小出)

以上、図 10 に示した用法の違いを考察した。

6.2.3 タトエ, イカニなど副詞との共起

ここでは、*=to=wa i-e*, *=to i-t-te=mo*, *=to=wa i-u=monono* とタトエ, イカニといった副詞との共起関係を述べる。(角田 2006b: 124 参照。)

=to=wa i-e は、タトエ ((69) 参照), イカニ ((70) 参照) と共起する。*=to i-t-te=mo* は、*=to=wa i-e* に比べると少ないようではあるが、タトエ, イカニと共起する例もある。((71), (72) 参照。) しかしながら、*=to=wa i-u=monono* は、タトエ, イカニなど、条件, 不定の意味を含む副詞とは共起しない。以下に例を示す。

- (69) ここで、伸子へ事情をしゃべってしまったらどうなるか? たとえ知らなかった とはいへ / *とはいうものの 会社の持ち物であるマンションを担保に五百万円もの借金をし、それを親類が使っていたとなったら、必ずや責任を取って辞職すると言い出すのは目に見えている。(赤川)
- (70) 家康としては、いかに敗北がせまっている とはいへ / *とはいうものの、浜松城頭にひるがえっている葵紋の白旗を後退させることはできなかった。(司馬)
- (71) たとえそれがしが技倆まさる と言っても / *とはいうものの、その場の運と呼吸一つで負けになるかもしれぬ。(司馬)
- (72) いかに十年走っていない といっても / *とはいうものの、このお粗末さはどういうことだ。(沢木)

=to=wa i-u=monono は、不定の意味を表す要素を従属節の中に含まない。すなわち、従属節で高い確信度を表すことを示す。「譲歩」は表すが「譲歩条件」は表さない。図9に示したことが成立する。

以上、(a) 従属節の表す意味の違い (6.2.2 節), (b) タトエ, イカニといった副詞との共起 (6.2.3 節) から、*=to=wa i-e*, *=to i-t-te=mo*, *=to=wa i-u=monono* の間に違いがあり、それが表す確信度と関係することを述べた。

このことは、それぞれの CLM の形態とも関係があると思われる。グループ C の CLM は動詞イウの活用形を含む。*=to=wa i-e* には命令形, *=to i-t-te=mo* にはテ形, *=to=wa i-u=monono* にはル形が含まれている。命令形とテ形の間には、グループ C においてもグループ B と並行的な確信度の違いが表れている。命令形よりもテ形がより高い確信度を表す。一方、ル形は、テ形よりもさらに高い確信度を表すと言える。

7. 「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」, 「極値」の確信度の違い

譲歩条件節の四つのタイプ(「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」, 「極値」)については, 4.1.1 節で, 「極値」が最も内容が確定していること, すなわち話者のより高い確信度を示すことを述べた。実際に, 最も高い確信度を表すグループ C の CLM では, 「極値」の用法が中心になる。(図 8 参照。)

「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」の中では, 表す確信度は「肯定否定」が最も低いと思われる。すなわち, 「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」, 「極値」の表す確信度の違いは図 2 の通りと見るのが妥当である。「肯定否定」, 「併記」, 「普遍的」の中で, 表す確信度は「肯定否定」が最も低いと見る根拠を以下で示す。

まずグループ C では, $=to=wa\ i-e$ に「併記」の用法はある。(6.1 節参照。) また, 6.2.3 節で述べたように, $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$ においては「極値」の例の中に, タトエ, イカニなどの副詞を含むことができる。イカニを文副詞として用いる場合は, 「極値」の例と考えられるが(注 5 参照), 不定性を表すという点では, 「普遍的」と共通し, その連続体にある。すなわち, グループ C において, 「併記」, 「普遍的」の要素はかすかに残っていると言える。一方, 「肯定否定」のタイプは, グループ C ではまったく見られない。

また, グループ B の CLM に関しても, 5.2.2.2 節で述べたように, 「肯定否定」が少なく, 「極値」が多いという傾向が共通に見られる。

グループ A の CLM に関しては, 4.1.2 節で主節の意味の違いを述べた。筆者の観察では, 特に $-(y)oo=ga$ の「肯定否定」の場合には, 主節で「消極的, 無関心」タイプの意味が多く表れる傾向がある。(注 6 参照。)

上記のことを考え合わせると, 「肯定否定」は, 「併記」, 「普遍的」よりも, 表す確信度が低いと考えられる。

なお, 「併記」と「普遍的」の間の確信度の違いについては, 上記に述べた通り, グループ C においても両方の痕跡があるということで, 違いを認めるのが難しい。

ここでは, 従属節の四つのタイプと話者の確信度との関係において, 図 2 に述べたことが成り立つと考える。

8. 結論

本論では, 譲歩条件または譲歩を表す CLM について, 接続表現自体が話者の確信度の違い, すなわち epistemic modality を表していることを述べた。扱った CLM は下記の三つのグループに分けられる。

グループ A : $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to$, $-(y)oo=to=mo$, $-te=mo$

グループ B : $=ni\ se-yo$, $=ni\ si-ro$, $=ni\ si-te=mo$

グループ C : $=to=wa\ i-e$, $=to\ i-t-te=mo$, $=to=wa\ i-u=monono$

これらの CLM の形態的特徴と使い分けは, 角田 / Tsunoda (2003, 2004, forthcoming) が提案した「節接続とモダリティの階層」の五つのレベルに反映している。(表 1 参照。)

Haspelmath & König (1998) の提案した三つの譲歩条件節のタイプ (Alternative concessive

conditionals, Universal concessive conditionals, Scalar concessive conditionals) のうち, Alternative concessive conditionals を「肯定否定」(Polar) と「併記」(Listing) の二つに分けることを提案した。これらの四つのタイプの表す確信度は図2の示す順番である。すなわち, 「肯定否定 < 普遍的, 併記 < 極値」。さらに, 「肯定否定」と「併記」の区別は CLM の用法に反映している。

三つのグループの CLM の表す確信度については, 図1に示した関係が成り立つ。すなわち「グループ A < グループ B < グループ C」。

それぞれのグループの中の CLM の間にも, 表す確信度に違いがある。

グループ A については, (a) 譲歩条件節のタイプ, (b) 主節の意味の違いの観点から「 $-(y)oo=ga$, $-(y)oo=to < -(y)oo=to=mo$ 」を示した。(3) 参照。) (c) 譲歩条件節と主節の時間関係の観点から「 $-(y)oo=to=mo < -te=mo$ 」を示した。(4) 参照。)

グループ B については, (a) 譲歩条件節のタイプ, (b) 文接続マーカーとしての違いの観点から「 $=ni se-yo$, $=ni si-ro < =ni si-te=mo$ 」を示した。(図6参照。)

グループ C については, (a) 従属節の表す意味の違い, (b) 副詞(タトエ, イカニなど)との共起の観点から「 $=to=wa i-e < =to i-t-te=mo < =to=wa i-u=monono$ 」を示した。(図9参照。)

また, $=to=wa i-e$ は譲歩条件と譲歩の両方の意味を持つこと, $=to i-t-te=mo$ は, 譲歩の意味が主であるが, わずかに譲歩条件の意味を含むこと, $=to=wa i-u=monono$ は譲歩条件の意味は持たず, 譲歩の意味のみ表すことを述べた。

三つのグループについて述べたことを合わせると, 以下の図11の関係が成り立つ。

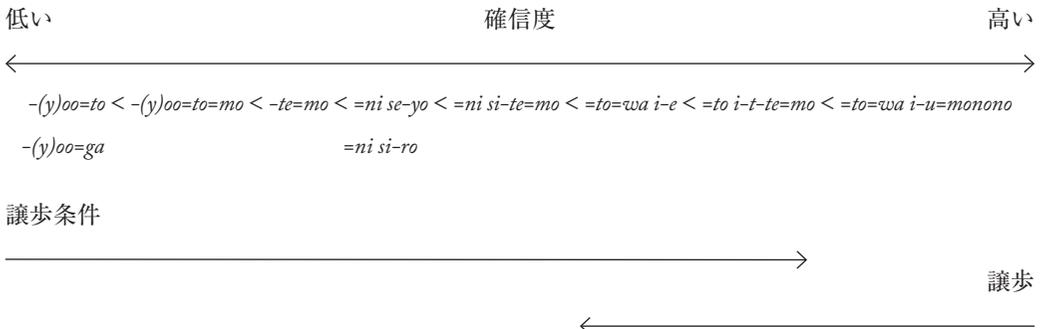


図11 確信度と CLM の形態の連続的相関

従来の研究では, モダリティについては, 日本語では主節の文末表現や陳述を表す副詞について述べるが多かった。しかしながら, 本論は CLM 自体がモダリティを表す場合があることを示した。

海外の先行研究では, 条件, 譲歩条件, 譲歩などの従属節マーカーに, 命令形, 願望形などの意志的なモダリティ (volitional moods) を表す形が現れることは, すでに広く知られている。(Haspelmath & König (1998) など参照。)

また, Dobrushina (2008) は, ロシア語など, いくつかの言語を見て, CLM に表れる動詞の命令形の人称の違いが, 反実仮想条件, 仮定条件, 譲歩条件, 譲歩の意味の使い分けを表すことを述べている。

しかしながら, 本論のように, CLM の中に含まれるスル, イウなどの動詞やその活用形 (-*y*)*oo* 形, 命令形, ル形など), 助詞の違いなどを総合的に見て, 確信度の違いを述べている研究は筆者の知る限りない。

本論で述べている現象は, 非常に興味深い現象であると思われる。例えば, Kortmann & König (1992) は, 動詞起源の前置詞と接続詞を扱い, 動詞が前置詞または接続詞に変化する中で, 動詞の特性を失うと述べている。しかしながら, 本論で述べる CLM の場合は, 動詞の活用形自体の違いで, 確信度の違いを表している。つまり動詞の活用形という特性を維持しながら, CLM の役割を果たしているのである。

本論は, グループ A の CLM では, II 「判断の根拠」, III 「働きかけ」のレベルにおいて, 従属節と主節の表す出来事的时间関係が異なる場合を表すことができることを述べた。それぞれ「順行」, 「逆行」と呼び分ける。グループ A の CLM は「順行」と「逆行」の両方の意味を表すことができる。しかし, 「逆行」の意味の表しやすさは, CLM によって異なる。-(*y*)*oo*=*to*=*mo* は「逆行」を表しやすいが, -*te*=*mo* は比較的, 「逆行」を表しにくい。管見では, この点は, これまで譲歩条件についての先行研究は指摘していなかった。

筆者が提案した枠組み (3.1 節参照) のレベルで, I 「現象描写」, II 「判断」, III 「働きかけ」は, Sweetser (1990) の枠組みの content domain に対応し, IV 「判断の根拠」は epistemic domain に対応し, V 「発話行為の前提」は speech-act domain に対応する。Epistemic domain と speech-act domain において, 従属節と主節の時間関係が逆になる場合があることは知られていた。(Haspelmath & König 1998: 569 参照。) しかしながら, 本論は II 「判断」, III 「働きかけ」のレベルにおいても, 即ち, content domain にも, 時間関係が逆になる場合のあることを示した。

参考文献

- Dobrushina, Nina (2008) Imperatives in conditional and concessive subordinate clauses. In: Edward J. Vajda (ed.) *Subordination and coordination strategies in North Asian languages*, 123-141. Amsterdam: John Benjamins.
- グループ・ジャマシイ (1988) 『日本語文型辞典』東京: くろしお出版。
- 藤田保幸 (2008) 「複合辞接続形式「～(よ)うと／(よ)うが」について」『日本言語文化研究』12: 13-28.
- Haspelmath, Martin and Ekkehard König (1998) Concessive conditionals in the languages of Europe. In: Johan van der Auwera and Dónall P. Ó Baoill (eds.) *Adverbial constructions in the languages of Europe*, 563-640. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 泉原省二 (2007) 『日本語類義表現使い分け辞典』東京: 研究社。
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』国立国語研究所報告 3. 東京: 国立国語研究所。
- 国立国語研究所 (2001) 『現代語複合辞用例集』東京: 国立国語研究所。
- König, Ekkehard and Peter Siemund (2000) Causal and concessive clauses: Formal and semantic relations. In: Elizabeth Couper-Kuhlen and Bernd Kortmann (eds.) *Cause, condition, concession, contrast: Cognitive and discourse perspectives*, 341-360. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Kortmann, Bernd and Ekkehard König (1992) Categorical reanalysis: The case of deverbal prepositions. *Linguistics* 30(4): 671-697.

- 前田直子 (2009) 『日本語の複文——条件文と原因・理由文の記述的研究——』東京：くろしお出版。
- 松浦恵津子 (2010) 「逆条件節をつくる形式—— テモ・〜トシテモ・ニシテモ・ニセヨ [ニシロ]」須田淳一・新井田純野 (編) 『日本語形態の諸問題』, 255-268. 東京：ひつじ書房。
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』東京：アルク。
- Narrog, Heiko (2009) *Modality in Japanese: The layered structure of the clause and hierarchies of functional categories*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Sweetser, Eve E. (1990) *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』東京：ひつじ書房。
- 富樫純一 (2005) 「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」——その意味と諸用法をめぐって——」『筑波日本語研究』10: 1-18.
- 角田三枝 (2003) 「日本語の節・文の接続とモダリティ」博士論文, お茶の水女子大学。
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』東京：くろしお出版。
- 角田三枝 (2006a) 「譲歩節と「節接続とモダリティの階層」(その1)」『成城文芸』196: 202-185 (横 65-82)。
- 角田三枝 (2006b) 「譲歩節と「節接続とモダリティの階層」(その2)」『成城文芸』197: 136-121 (横 19-35)。
- 角田三枝 (2007) 「日本語の動詞の活用表」『立正大学国語国文』45: (横) 1-7.
- 角田三枝 (2011) 「モノノとナイマデモ：節接続の五つのレベルにおける逆接と譲歩条件」『国立国語研究所論集』2: 107-134.
- Tsunoda, Mie. Forthcoming. Five-level classification of clause-linkage in Japanese. *Studies in Language*.

例文出典

- 『新潮文庫の100冊』(CD-ROM, 1995, 新潮社) より
- 赤川次郎『女社長に乾杯』, 石川達三『青春の蹉跎』, 北杜夫『楡家の人々』, 倉橋由美子『聖少女』, 沢木耕太郎『一瞬の夏』, 塩野七海『コンスタンティノーブルの陥落』, 司馬遼太郎『国盗り物語』, 高野悦子『二十歳の原点』, 立原正秋『冬の旅』, 筒井康隆『エディプスの恋人』, 藤原正彦『若き数学者のアメリカ』, 三木清『人生論ノート』, 村上春樹『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』
- ドラマ『イ・サン』(2012年2月26日放送)
- 国立国語研究所 KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(「中納言」Version 1.0.2 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>) より
- ゴーン・カルロス, フィリップ・リエス (高野優 訳) (2003) 『カルロス・ゴーン経営を語る』東京：日本経済新聞社。
- 日高道夫 (2002) 『友達』東京：文芸社。
- 廣辻徳彦 (中島正之 編著) (2005) 『白内障・緑内障治療とケア Q&A——目の病気がトータルにわかる』京都：ミネルヴァ書房。
- 加来耕三 (1997) 『家康の天下取り』東京：中央公論社。
- 栗原修司 (2002) 『生と死への気づき』東京：文芸社。
- 小出裕章 (1992) 『放射能汚染の現実を超えて』東京：北斗出版。
- 古関忠男 (2003) 『言いたい事は山ほどある』東京：モッツ出版。
- 国会会議録 (1979)
- 国会会議録 (2001)
- 村上春樹 (1990) 『遠い太鼓』東京：講談社。
- 森村誠一 (1977) 『青春の証明』東京：角川書店。
- 永瀬隼介 (2005) 『永遠の咎』東京：光文社。
- 中西智海 (監修) (2005 改訂新版) 『浄土真宗』東京：世界文化社。
- ニコルスン・ジェフ (雨海弘美 訳) (2003) 『美しい足に踏まれて』東京：扶桑社。
- 大前研一 (1990) 『新・国富論』東京：講談社。
- 大沼孝次 (2001) 『ラブひな 美少女キャラ分析書』東京：フットワーク出版。
- 佐久間耕治 (2002) 『底点の自由民権運動』東京：岩田書院。
- スティルウェル・アレグザンダー (小路浩史 訳) (2001) 『完全サバイバル・ブック——SAS 特殊部隊式 あらゆる危険に対応する!』東京：原書房。
- 武田厚 (1992) 『現代ガラスの魅力』東京：芸術新聞社。
- Yahoo! 知恵袋 (2005) Yahoo!

Verbal Inflectional Morphology and Modality in Clause-linkage Markers

TSUNODA Mie

Project Collaborator, National Institute for Japanese Language and Linguistics [-2012.03]

Abstract

This paper deals with Japanese clause-linkage markers ('CLMs' hereafter) that have a concessive conditional meaning or a concessive meaning. It divides them into three groups and demonstrates the four points listed in (a) to (d) below.

Group A: *-(y)oo=ga*, *-(y)oo=to*, *-(y)oo=to=mo*, *-te=mo*

Group B: *=ni se-yo*, *=ni si-ro*, *=ni si-te=mo*

Group C: *=to=wa i-e*, *=to i-t-te=mo*, *=to=wa i-u=monono*.

(a) The morphological properties and uses of these CLMs are reflected in the five-level classification of clause-linkage that I have proposed (Tsunoda 2003, 2004, and forthcoming).

(b) A previous study divided Concessive conditionals into three construction types: Alternative concessive conditionals, Universal concessive conditionals, and Scalar concessive conditionals. This paper divides Alternative concessive conditionals into two separate types, 'Polar' and 'Listing', distinguishing four types in all. The distinction between 'Polar' and 'Listing' is reflected in the uses of CLMs. These four types of Concessive conditionals indicate different degrees of belief/confidence expressed by the subordinate clause: Polar < Universal, Listing < Scalar.

(c) The morphological properties of these CLMs — in particular the verbal inflectional morphology contained in them — express epistemic modality. Specifically, they indicate different degrees of the speaker's belief/confidence in the likelihood of the existence/occurrence of the situation described by a given concessive conditional/concessive clause.

(d) The degree of the speaker's belief/confidence expressed by the three groups of CLMs above conforms to a hierarchy: Group A < Group B < Group C. Also, individual CLMs in each group express different degrees of speaker belief/confidence.

Key words: concessive conditionals, concessive, verbal inflectional morphology, confidence, epistemic modality